

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

科学研究費助成事業

研究成果報告書



令和 4 年 4 月 30 日現在

機関番号：12601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2021

課題番号：19K23360

研究課題名（和文）適応的な向社会的行動の実行につながる理解の発達の变化

研究課題名（英文）Cognitive development that enables the execution of adaptive prosocial behavior

研究代表者

二村 郁美（Futamura, Ikumi）

東京大学・大学院教育学研究科（教育学部）・特任研究員

研究者番号：00843351

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究では、幼児を対象として、向社会的行動の対象者の過去の振る舞いに焦点をあて、向社会的行動の実行・不実行に対する評価の特徴を検討した。研究の結果、幼児であっても、向社会的行動の対象者が過去に向社会的に振る舞ったか否かという文脈情報を考慮した判断が可能であることが明らかになった。また、過去に向社会的に振る舞わなかった人物の行動予測においては、必ずしも向社会的でない振る舞いを繰り返すとは限らないという判断をすることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究によって、幼児が、向社会的行動の対象者に応じて、その行動の適切性や、行動実行・不実行の結果生じる影響について、どのように理解しているかが明らかになった。向社会的行動に関する理解のあり方は、その行動の実行にも影響を及ぼすものであり、本研究の知見は、向社会的行動の実行メカニズムの発達に関する理論的発展をもたらすものである。また、本研究の知見は、向社会的行動が持つ意味を文脈に応じて理解し、適切な行動選択を可能にするための介入においても有用な視点となる。

研究成果の概要（英文）：This study examined children's judgment of prosocial behaviors focusing on the past behavior of the recipient. The results showed that it was possible for children aged 4 to 6 years to judge prosocial behaviors in consideration of whether or not the recipients have behaved prosocially in the past. It was also shown that children judged a person who did not behave prosocially in the past would not necessarily repeat non-prosocial act.

研究分野：発達心理学

キーワード：向社会的行動 理解 幼児 文脈

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

本研究では、子どもたちが適応的な形で向社会的行動を実行できるようになる上で有益な実証的知見を提出することを目的とする。向社会的行動は、さまざまな対象に対して、短期的・長期的に多様な形で影響を及ぼし得る (Nowak, 2006)。適応的に向社会的行動を実行するためには、相手の短期的な利益のみを考えるのではなく、さまざまな対象への長期的な影響を考慮する多面的な視点を持って、向社会的行動がもたらす影響について理解できることが重要になる。そこで本研究では、向社会的行動の性質に関する理解の特徴について、発達の観点から検討する。

2. 研究の目的

本研究の目的は、向社会的行動がもたらす影響に関する理解の特徴について、発達の観点から検討することである。向社会的行動が持つ意味は、その行動が行われる文脈に応じてさまざまに変化する (Berman & Silver, 2022; Newman & Cain, 2014; Pleasant & Barclay, 2018)。向社会的行動の意味や、その行動によって生じる影響について考えるうえで、とりわけ、その行動がどのような相手に対して行われたものかという点は重要になる (Hamlin, Wynn, Bloom, & Mahajah, 2011; Ohtsuki & Iwasa, 2004)。本研究では、二者間での相互作用場面と三者間での相互作用場面を取り上げ、相互作用の相手が向社会的であるか否かに焦点をあて、子どもによる理解の様相を検討した。

3. 研究の方法

(1) 二者間での向社会的行動と非向社会的行動に関する判断

4-6 歳児 65 名を対象として、個別形式による実験を行った。この研究では、二者間での相互作用場面を用いて、相手が向社会的行動を実行した場合と実行しなかった場合における、主人公による向社会的行動の実行と不実行に対する評価を求めた。

A4 版の図版を用い、クレヨンの貸し借り場面を題材としたシナリオを提示した。シナリオは、B が A を助けたか否かと、A が B を助けたか否かの組み合わせにより、①B が A を助け、A も B を助けた、②B が A を助け、A が B を助けなかった、③B が A を助けず、A が B を助けた、④B が A を助けず、A も B を助けなかったの 4 通りが各参加者に提示された。各物語について、A および B に対する特性評価を求めた。

(2) 三者間での向社会的行動と非向社会的行動に関する判断

5-6 歳児 35 名を対象として、個別形式による実験を行った。この研究では、三者間での相互作用場面を用いて、相手が第三者に対して向社会的行動を実行した場合と実行しなかった場合における、主人公による向社会的行動の実行と不実行に対する評価を求めた。

A4 版の図版を用い、クレヨンの貸し借り場面を題材としたシナリオを提示した。シナリオは、B が A を助けたか否かと、C が B を助けたか否かの組み合わせにより、①B が A を助け、C も B を助けた、②B が A を助け、C が B を助けなかった、③B が A を助けず、C が B を助けた、④B が A を助けず、C も B を助けなかったの 4 通りが各参加者に提示された。各物語について、B および C に対する特性評価と、B のその後の行動予測を求めた。

(3) 三者間での向社会的行動と反社会的行動に関する判断

4-6 歳児を対象として、個別形式による実験を行った。この研究では、三者間での相互作用場面を用いて、相手が第三者に対して向社会的行動を実行した場合と反社会的行動を実行した場合における、主人公による向社会的行動の実行と反社会的行動の実行に対する評価を求めた。

パペットを用いた短い動画をタブレットで提示した。動画の内容は、B から A に対する行動（向社会・反社会・ニュートラル）と、C から B に対する行動（向社会・反社会）の組み合わせによる 6 通りであった。各物語について、C に対する選好、C の行動の道德判断、C のその後の行動予測を求めた。なお、本研究では、B が善い相手か悪い相手かを明確にした形での検討を行った。

4. 研究成果

(1) 二者間での向社会的行動と非向社会的行動に関する判断

B に対する評価には、B が向社会的に振る舞ったか否かが影響しており、B が向社会的に振る舞わなかった場合よりも、向社会的に振る舞った場合にポジティブに評価された。A に対する評価には、A の行動と B の行動の両者が影響していた。A が向社会的に振る舞わなかった場合よりも、向社会的に振る舞った場合にポジティブに評価された。また、B が向社会的に振る舞った場合よりも、向社会的に振る舞わなかった場合に、A はポジティブに評価された。A の向社会的行動を評価する際に、相手である B が向社会的に振る舞ったか否かという文脈情報を考慮できることが示された。

（２）三者間での向社会的行動と非向社会的行動に関する判断

B に対する評価には、B が向社会的に振る舞ったか否かが影響しており、B が向社会的に振る舞わなかった場合よりも、向社会的に振る舞った場合にポジティブに評価された。C に対する評価には、C の行動と B の行動の両者が影響していた。C が向社会的に振る舞わなかった場合よりも、向社会的に振る舞った場合にポジティブに評価された。また、B が向社会的に振る舞わなかった場合よりも、向社会的に振る舞った場合に、C はポジティブに評価された。行動予測においては、B が過去に向社会的に振る舞った場合には、B は次も向社会的に振る舞うと予測されたのに対し、B が過去に向社会的に振る舞わなかった場合については、向社会的に振る舞わないという予測はチャンスレベルを超えなかった。三者間の相互作用場面においても、C の向社会的行動を評価する際に、相手である B が向社会的に振る舞ったか否かという文脈情報を考慮できることが示された。また、過去に向社会的に振る舞わなかった人物であっても、必ずしも向社会的でない振る舞いを繰り返すとは限らないと判断されることが明らかになった。

（３）三者間での向社会的行動と反社会的行動に関する判断

本研究については、当初の予定数の 3 分の 2 ほど実施を終えた時点で、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、実験を一時中断することとなった。現在も、協力園と実験再開に向けた協議を進めており、再開可能となり次第、速やかに追加実施し、分析および論文化を進める。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 二村郁美	4. 巻 第4号
2. 論文標題 幼児期における他者への思いやりを育む保育者の関わり	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 川村学園女子大学教職センター年報	6. 最初と最後の頁 81-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 二村郁美
2. 発表標題 幼児による向社会的行動の評価における文脈の影響—間接互惠場面を用いた検討—
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 二村郁美
2. 発表標題 幼児による間接互惠場面における行動予測
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 二村郁美
2. 発表標題 幼児による間接互惠場面における行動予測の理由
3. 学会等名 日本発達心理学会第33回大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------